

19. 六興開拓

酒井健次

※明治31年8月20生、富山県出身。
明治40年六興に入地。

初期の人々

私は10才のとき、父（常次郎）に連れられて、六興に入植した。この時、忍路子の中野治平さんの父親竹次郎さんと一緒だった。

入地した場所は、今の青木喜市さんの川向いに、中野さんと隣り合せて入植、古川鶴次郎の小作だった。

そのころの開拓は、子供心にも良く覚えているが、大木が密生していて、あまり太い木は、伐っていたのでは、はかが行かないので、木によじ登って枝を下し、立ち枯れにして地面に陽がさすようにした。うちの父は、体重が20（75キロ）以上あったが、木登りが上手で、細い枝まで伐りおろしたので、よそから頼まれて、枝おろしの手伝いに行ったものだ。

学校は、私たちが来たときには、まだできておらず、2年程して、旧六興橋附近にできたが、これは、向井伊三郎、原田鉄五郎、石田卯之助、川勝庄太郎、それに父親らが、建設に努力したと聞いている。

学校は、吉野軍次郎、小林弥五郎、関の息子（恒三郎）の皆さんと5人ほどが同級生で、年令もまちまちで、亡くなった大西キサさんも一緒だった。

今の大行寺は、もと上興部（東興）にあったのを、古川さん、木島さんや家の父らが骨を折って、六興橋の少し下流の一段下った所に移ってもらった。寺は掘立てで粗末だったが壇家が建築した。

その時の住職は、名前は忘れたが独身で、三味線の上手な坊さんだった。大正5、6年ころ、この坊さんの姿が見えないので、父親が見に行つてこいと言うので行つて見ると、布団を敷き放しで、人が脱け出したままになっていて、夜逃げをしたらしく、とうとう何処へ行ったか分らなかった。その後2年程空家になっていたが、まだ独身だった大井智行さんに来てもらった。

鉄道の開通時に、大井さんは、瀬戸牛の現在地に移られたのだ。

商店と澱粉工場

大正の初めころには、六興橋周辺には、25、6戸の家があり、古川鶴次郎が雑貨店と飲食店を経営、佐々木と言う酒屋もあったし、三好という兄弟で経営する鍛冶屋、蹄鉄屋があつて、鉄道開通後、滝上独川に移住したが、仕事は上手だった。

※「三好は、明治末期から大正初年にかけて、上興部妙覚寺附近で営業後、六興に移る。

そのころの六興は、七重より人家が多く、夜になると、七重の若い人たちが、わざわざ遊びに来たもので、開拓当時は、この辺が中心みたいなものだった。

七重、六興地区で澱粉工場を、一番初めにやった人は、旧六興橋の中学校寄り、小林弥三郎さんが、大きな発動機2台を使った大きな工場だった。発動機を使ったのは、

この村では初めてであろう。4、5年で澱粉の暴落で倒産したが、小林さんは上葉でも工場をやっていた。倒産後暫くしてから、深川さん附近で馬廻しの澱粉工場をやったが、これは余り大きくなかった。

大正7年ころ、青木さん附近の一段低い堤防ぶちで、古川が澱粉工場を初めたが、これも人を20人位使った大きな工場だった。

此所では、丸鋸を使って製材した事もあり、後の齊藤澱粉工場だ。

そのほか、2線の沢で、黒沢という人が澱粉工場を始め、後に目黒甚吉に変わった。

また村井農場ができて、管理人の絹川久が、川向いで工場を始め、松田農場に変わってから佐藤伊造が経営した。

開拓当時の菜種はよく穫れたもので、反当5俵くらいは欠かさなかった。雑穀類は、名寄方面から買付けに来たが、父は小林さんと仲が良かったので、獲れたものは全部小林さんに売っていた。

小林さんは、澱粉工場、造材、雑穀買いと手広く事業をやっていた。

開拓時に比べ、六興も人口が減り淋しくなったものだ。